

レーメゾフの『公務の地図帳』と 描かれたシベリア地域像

米 家 志乃布

はじめに

ロシアの地図作製史において、ロシアのシベリア進出に伴って作製された地図に関する研究は数多く存在する⁽¹⁾。そのなかでも近年の研究では、ポスニコフによる研究が重要である。ポスニコフは、ロシア革命までのロシアの大縮尺地図の作製史⁽²⁾ およびロシア人によるシベリアから「ロシア・アメリカ」への進出過程と地図作製史を論じた研究⁽³⁾ において、ロシアが作製したシベリア図について述べている。また、ロシアの人種地図の作製史を論じたプスヤンチンもシベリア図に触れている⁽⁴⁾。近年では、アメリカの歴史学者キベルソンが、17世紀から18世紀初期のシベリア図についての研究を行っている⁽⁵⁾。日本においても、1960年代～70年代にかけて、三上正利によるシベリア図に関する詳細な研究がある⁽⁶⁾。また、船越昭生⁽⁷⁾ や秋月俊幸⁽⁸⁾ による日本北方地域の地図史を対象とした研究のなかでも、ロシア人によって作製されたシベリア図の紹介は行われている。

これらのシベリア図研究の流れのなかで、本稿で対象とするシベリアを描いた地図帳の作者であるセミュン・ウリヤーノビッチ・レーメゾフ⁽⁹⁾ (以下、レーメゾフと記す) が作製したとされる地図帳は、ロシアの地図作製史において欠かすことのできない重要なものである。その理由として、第一に、ロシア人によって作製された現存する最古のシベリア全図とされる「ゴドゥノフ図」⁽¹⁰⁾ との関係が濃厚であること、第二にロシア人による17世紀に作製されたロシア製のシベリア図の総

括的なものであること⁽¹¹⁾、第三にその後ロシアにおいて発達したロシア製「民族地図」の第一段階であると位置づけられること⁽¹²⁾ などが挙げられる。

ロシアにおいて地図作製が行われたのは13～15世紀ルーシの時代からである⁽¹³⁾。16世紀には、ロシアの地図は他のヨーロッパの国々で作製されたロシア図に影響を与えたという⁽¹⁴⁾。そして、17世紀初期には、シベリア部分を含んだ「大地図」が作製された⁽¹⁵⁾。1626年の地図作製命令や1633年の地図の説明書きなどから、シベリア部分を描いた詳細な地図が作製されたとする⁽¹⁶⁾。しかし、いずれの地図も現存しておらず、古文書や目録上で確認できるのみである。

ロシアの地図史における現存する最古のシベリア全図は、1667年作製のシベリア全図(ゴドゥノフ図)である。この地図の複写図がレーメゾフの地図帳に掲載されており⁽¹⁷⁾、多くの研究者がこの地図を引用した。また、現存するレーメゾフの地図帳には、ゴドゥノフ図以外のシベリア全図およびシベリア各地の地域図が収録されている。これは、17世紀末にモスクワのシベリア庁に集められていたシベリア諸地域の地図からレーメゾフと息子達が複写し、自らの地図帳に編集したものである。地図帳のなかには、レーメゾフ自身の測量や収集した情報で作製した地図も存在する。

このように、17世紀末～18世紀初期に複写された多数の手書き地図が地図帳というまとまった形態で現存していることは、史料として大きな価値があるといえる⁽¹⁸⁾。さらにロシアにおいては、18世紀～19世紀にかけて多くの人種地図が作製

された。これらの地図作製史において、レーメゾフの地図帳のひとつに掲載されている17世紀後半の民族地図が、ロシア地図史における現存する最初の民族地図（人種地図の前段階）であると位置づけられている⁽¹⁹⁾。それゆえ、このレーメゾフ作製の民族地図にも多くの研究者が関心を寄せた。

以上述べたように、レーメゾフの作製した地図帳に所収されたシベリア図は、当該期のロシアによるシベリア図の作製史を論じるうえで重要な地図である。これらの地図は、17世紀末～18世紀初期のロシア人によって作製された代表的なシベリア図であり、当該期におけるロシア人の持つシベリア地域像を考察するうえで重要な証拠となると思われる。

しかし、レーメゾフの作製した地図帳は三冊存在し、それらの地図帳に所収されているシベリアの地域図やシベリア全体図の構成は異なる。地図帳の作製目的の違い、地域情報の特色や更新などで、同じレーメゾフが編纂した地図帳でも表現される地域像が異なっていることが予想される。また地図帳の作製年代や掲載地図の違いによっても、レーメゾフの描くシベリアの地域像は変化したと思われる。従来の研究では、これらの点を軽視して、地図帳を構成する多数の地図のうちシベリア全図のみに注目した。あるいは、三冊の地図帳のうちの一部のみに着目してレーメゾフの地図作製を論じてきた。そのため結果的には、レーメゾフの活動の一部を取り上げて、それが当時のシベリアの地図作製を代表するものであるとして扱ってきたといえる。

そこで本稿では、各地図帳所収の個別のシベリア図を問題にするのではなく、各地図帳の掲載図全体の特徴からレーメゾフによるシベリア地域像の特徴を把握することを目的とする。なかでも、もっとも後年に作製され編集された『公務の地図帳』を中心に考察する。

I トボリスクにおけるレーメゾフの業務と地図帳の編纂

(1) レーメゾフの業務と地図作製

17世紀のロシアによるシベリア進出に際し、情報収集において前衛的な位置づけにあったのはトボリスクである。重要な河川交通の拠点であるトボリスクは1587年に建設された。当初は先に建設されたチュメニの管轄にあったものの、1590年にはシベリアの首都となり、シベリア全体の軍事・行政の中心地となった（第1図）。シベリアへのロシア人の移住が進展すると、トボリスクは軍事・行政だけでなく、シベリアにおける文化・経済の中心地としても機能した⁽²⁰⁾。17世紀～18世紀にかけて、トボリスクはシベリアにおけるあらゆる情報収集の場であり、シベリア全体と国家の中心であるモスクワを仲介する場でもあった。シベリアの地図作製がロシアの地方都市であるトボリスク在住のレーメゾフによって行われたことは、当該期のロシアにおける地図作製のための情報収集と把握のあり方を論じるためには、重要な意味があると考えられよう。以下、先行研究で明らかにされたことを中心に、レーメゾフの個人史とその業務についてまとめる。

レーメゾフは1642年トボリスク生まれ、1682年小士族として登録された。彼には4人の息子（レオンティ、セミオン、イワン、ピョートル）と1人の娘がいた。レーメゾフ家は、セミオンの祖父のモイセイが1628年にモスクワからトボリスクへ移って以降はトボリスクに住んだ。父のウリヤンは1647年から軍事勤務者を拝命した形跡が見られ、1664年にはイシム川方面に巡検してその結果を地図に描いたことが記録に残っている。また彼は1667年から3年間、トボリスクのゴドゥノフ軍政官の側近としても務めた⁽²¹⁾。レーメゾフ家は当該期の代表的な現地における「軍事勤務者」⁽²²⁾である。レーメゾフ家は、レーメゾフの祖父の代からシベリアの中心都市であるトボリスク在住の小士族であり、シベリアの情報に精通した



第1図 シベリアにおける主要都市（17～18世紀初期）

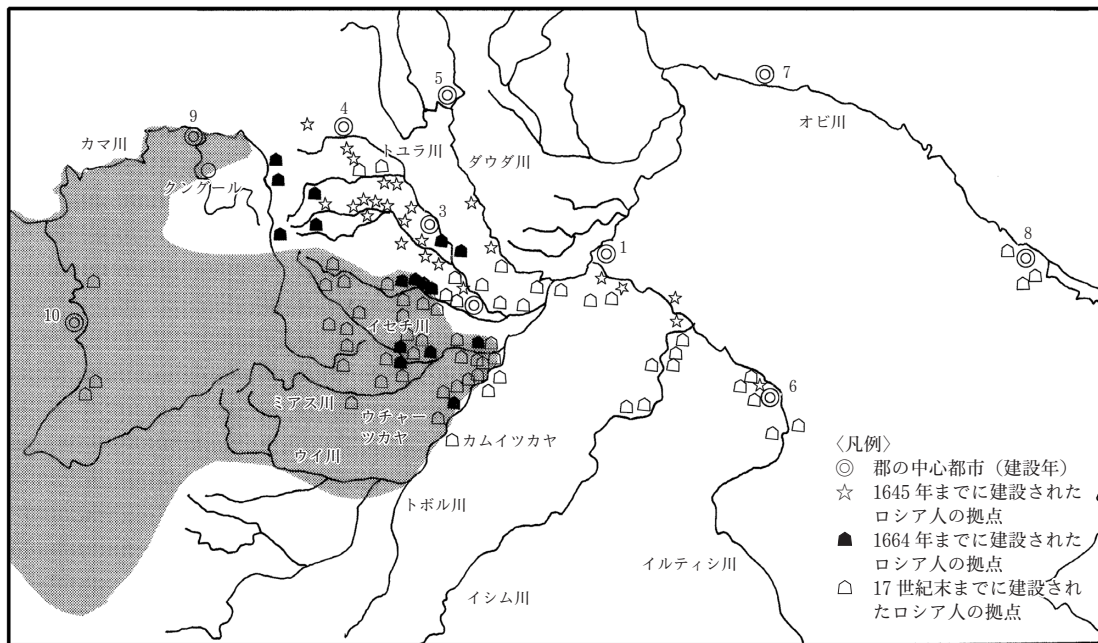
Figure 1. Russian colonial cities in Siberia from the seventeenth century to the early eighteenth century

ロシア人であった。

レーメゾフの軍事勤務者としての主な業務のひとつとしてトボリスク周辺地域への派遣があった。1682年に西シベリアの古くからのロシア人拠点であるタラへ、1683年にはトゥラ川上流域のロシア人拠点であるベルホトゥリエへ派遣される。1684年にもベルホトゥリエ、同じくトゥラ川流域のロシア人拠点であるトゥリンスクへ他の軍事勤務者達と共に遠征した（第2図）。1684年から1687年にかけてはトボリスク郡の各地へも調査に赴いている。1687年にはイルティシ川流域、1688年にはトボリスク町内の巡検にも従事している。レーメゾフは、これら一連の派遣業務に従事するとともに、1689年にはすでに「様々な年代のトボリスクの町や村々、シベリアの他の町に関する多くの地図を描いた」⁽²³⁾ 熟練した地図作製者であったとされる。この1680年代のレーメゾフの地図作製の仕事としては、1683年から1685

年のデータをもとに、トボリスクにおいて、1687年のシベリア全図（『地勢図帳』162裏）の編集が行われた。1690年にはモスクワのシベリア庁にレーメゾフが訪問した記録が残されている。翌年にはモスクワからトボリスクに戻り、イシム川流域の各地へ赴いた。

レーメゾフは、1683年から1695年までヤサク徴収に関わる業務にも就いていた。1696年4月から9月にかけてはイセチ川支流のミアス川流域への派遣、同年10月には、トボル川、イセチ川、ニツツア川、プシマ川、ミアス川、トゥラ川、タウダ川流域の要塞、ロシア人の村々、ヤサク郡の村々など小河川や湖なども含めた自然境界などを地図に示すためにトボリスクを出発し、測量業務に就いた（第2図）。レーメゾフがトボル川流域への調査に従事した1696年にモスクワのシベリア庁から全シベリア図の作製に関する勅令がでた。レーメゾフはその際に地図作製者として任命され



〈凡例〉

1. トボリスク 2. チュメニ 3. トゥリンスク 4. ベルホトゥリエ 5. ベリム 6. タラ 7. スルグト
8. ナルイム 9. ペルミ 10. ウファ

出所：シブiri-атлас Азиатской России, Москва, 2007. С. 510-511 より作成

第2図 トボリスク周辺におけるロシア人集落分布とバシキール民族の勢力範囲（17～18世紀初期）
Figure 2. Distributions of Russian villages and territory of the Bashkirs
from the seventeenth century to the early eighteenth century

る。レーメゾフは、1697年には「カザフ・オルダの地図」（『地勢図帳』163、『シベリア地図帳』20、『公務の地図帳』51裏～52）と「トボリスク地方の地図」（『シベリア地図帳』2、『公務の地図帳』28裏～29）を作製した。両図ともにトボリスクからモスクワのシベリア庁に送った⁽²⁴⁾。

また1698年にはトボリスクの全建築物の建設指導者にも任命された。トボリスクは、シベリアの首都であるにもかかわらず、火災の絶えない町であった。トボリスクは、他のシベリアの諸都市と同様に、木造建築物が中心の町であった。シベリア庁は、政治中心都市であるトボリスクの主要な施設を石造建築物にする必要があった。そこで、地図作製業務をすでに行っていたレーメゾフがトボリスクの都市改造のための指導者に任命されたのである⁽²⁵⁾。レーメゾフと息子達は、モスクワにおいて石造都市建設のための建築技術を学ぶた

めに、1698年6月28日にトボリスクを出発した。そのモスクワ滞在中に、再びシベリア地域の全情報をまとめてシベリア図を編纂する命令を受けたのである⁽²⁶⁾。

また、『シベリア地図帳』の作製についても、同年11月に命令を受けた。モスクワでの作業を終えてトボリスクに地図を持ち帰ったレーメゾフ親子は、それらの地図および自ら作製した地図をもとに『シベリア地図帳』を編纂し、1701年に完成した。完成した『シベリア地図帳』はモスクワに送付された。

『シベリア地図帳』完成後のレーメゾフは、1703年にウラル地方のカマ川上流域にあるクングールへの派遣業務に従事し、その際クングールの地図を作製した（『公務の地図帳』65裏面～68）。1703年～1704年にかけてはウラル山脈イセチ川上流域における鉄生産地で有名なカメンスキーへ

調査に赴いている。この鉄工場の見取り図や機械図面なども『公務の地図帳』に掲載している。1704年～1712年にかけてもトボリスク郡での派遣・巡検業務や地図作製などに従事している。また、1710年～1712年にはトボリスク郡とチュメニ郡の人口世帯調査にも携わっている。1710年と1720年の史料には、レーメゾフの孫に関する記録も存在する。トボリスクの下町地区にレーメゾフの息子であるピョートルと孫のアレクセイ（レオンティの息子）、その他にレオンティの妻と3人の子供たちが居住していた。レオンティは、『公務の地図帳』に残された彼の筆跡から、1730年代までは生存が確認できる。息子のセミョンとイワンは1716年、ピョートルについては1734年の記録が最後であり、その後、息子達がどうなったのかは不明である。レーメゾフは、ピョートル一世の命令でシベリア調査を行ったドイツ人学者のメッセルシュミットの記録から、1720年～1721年の間に確実に生存が推測できるものの、それ以後のことは不明である。

(2) レーメゾフ作製の地図帳の相互関係

レーメゾフとその息子達が作製した地図帳には三冊のバリエーションが確認されている。まずひとつは、ハーバード大学図書館が所蔵する『地勢図帳』である⁽²⁷⁾。ファクシミリ版でのモノクロの複製本が1958年に出版された⁽²⁸⁾。これには地図帳のテキストに関する現代ロシア語訳などは付されておらず、テキストの分析はこの複製本では不可能である。次に、モスクワのロシア国立図書館地図部のルマンチェフ伯爵コレクションの『シベリア地図帳』である⁽²⁹⁾。この地図帳は、1882年にサンクトペテルブルクですでに複製本が出版されており⁽³⁰⁾、日本国内では国立国会図書館が所蔵していたため、ソ連時代においても複製本の閲覧は可能であった。しかし、2003年にモスクワで新たに写真複製され、カラーの複製本とテキストの現代ロシア語訳と研究論文が付され⁽³¹⁾、研究上の便宜はさらに向上した。

最後が本稿で主な分析対象とする『公務の地図

帳』である⁽³²⁾。本地図帳は、サンクトペテルブルクのロシア国立図書館文書部に原本が存在していたものの、貴重書のため限られた研究者の閲覧しかできなかった。そのため長らく複製本の刊行が待ち望まれていたものである。ようやく2006年に写真複製され、カラーの複製本にテキストの現代ロシア語訳が付されて出版された⁽³³⁾。

従来のレーメゾフの地図帳を利用した研究では、これら地図帳に掲載されているシベリア全図を取り上げて分析を加えたものが多かった。その研究史をまとめた前述の三上による諸論文⁽³⁴⁾によれば、1687年のシベリア全図（『地勢図帳』162裏）、『シベリア地図帳』21、『シベリア地図帳』23、『シベリア地図帳』および『公務の地図帳』の説明書きに記述されている「エカチェリーナ宮殿の地図」の四枚の地図についての検討である。いずれも、作製年代や作製者、描かれている範囲などが詳細に研究されている。また、前述のエフィーモフの編集したアトラス⁽³⁵⁾においても、レーメゾフの地図帳所収のシベリア図が掲載されている。またこのアトラスには、ロシアで作製された多くのシベリア図が掲載されており、それを見れば、レーメゾフのシベリア図を含めて、各地図におけるシベリアの範囲と地図に描かれている情報の変化や差異について把握できる。

ソ連時代において、この三冊の地図帳の内容を比較検討した研究者はゴリデンベルクのみである。1940年代にアンドレーエフは、いくつかの古文書の記述およびシベリア庁長官のヴィニウスの書き込みから、ロシア国立図書館のルマンチェフ伯爵コレクションの『シベリア地図帳』は、レーメゾフの原本ではなく、レーメゾフの作製した地図帳の複写であると推定した⁽³⁶⁾。しかし、ゴリデンベルクは、レーメゾフや息子たちの三冊の地図帳に残る筆跡を丹念に分析し、『シベリア地図帳』も他の二冊と同様、レーメゾフと息子たちによって作製された原本であるとした⁽³⁷⁾。最近になって、これら三冊の地図帳のすべてに上記のように複製本が出版された。

地図史研究では古地図を一次史料とするため、

特に領土問題など現代的な事柄との関連がある場合は、外国人研究者には原本の閲覧や撮影が著しく制限される傾向がある。複製本が三冊揃ったことにより、ロシア国外でこれらの地図帳について比較検討を行うことができるようになったことは、大きな研究活動上の進展であるといえる。

レーメゾフ作製の三冊の地図帳の中で、『シベリア地図帳』はレーメゾフがモスクワ滞在中にシベリア庁から依頼を受けて編纂したものであり、ロシアの中央政府による命令で作製され提出された地図帳である。その他の二冊の地図帳は、レーメゾフ家に私的に保管されたものであった。『シベリア地図帳』は、完成後すぐにトボリスクからモスクワのシベリア庁に送付されて保管された。この地図帳はシベリア庁の業務に使われたものであった。当該期におけるシベリア庁長官であったヴィニウスの書き込みも存在する⁽³⁸⁾。『シベリア地図帳』の編纂命令をレーメゾフがモスクワのシベリア庁で受けたのは1698年11月である。1699年1月に各地図の複写をトボリスクに持ち帰った。その後1月30日からトボリスクにおいて地図を編集し1701年1月1日に完成した。『シベリア地図帳』所収の23枚の地図は1699年～1701年の間にレーメゾフ親子によって編集された地図である⁽³⁹⁾。

『地勢図帳』は、トボリスクにおいてレーメゾフ家が保管していた地図帳である。地図帳の掲載図は168枚であり、シベリア各地の重要河川流域の「地勢図」が中心である。これらの地図は、各シベリア地域図を編集する際の基礎情報であることが推測できる。レーメゾフ親子は、この情報を『シベリア地図帳』所収のトボリスク地方図やシベリアの各地域図の編集の際にも利用したものと思われ、『地勢図帳』の地図は『シベリア地図帳』編集の際の元データのひとつであったともいえる。その他、ゴドゥノフ図の写し（『地勢図帳』4）1枚、シベリア全図の写し（162裏）1枚、中国図1枚、トボリスク都市図やシベリア地域図などが15枚掲載されている。『地勢図帳』の説明書きによれば、この地図帳の編集について、「現在図」

は1697年3月から開始し、各河川の流域を中心とした地勢図は1697年9月1日から作製を開始したことが明記されている。しかし、『地勢図帳』に掲載されている地図の多くは『シベリア地図帳』の完成後にまとめられたものであり、地図の複写年代は1703年～1711年と推定されている⁽⁴⁰⁾。

『公務の地図帳』も『地勢図帳』と同様に、レーメゾフとその息子達によって編集され、トボリスクのレーメゾフ家に保管されていた地図帳である。地図帳に掲載されている図は、『シベリア地図帳』『地勢図帳』にも掲載されているトボリスクおよびシベリア諸地域の地図、『地勢図帳』にもある最初のシベリア全図とされる「ゴドゥノフ図」の複写図、『シベリア地図帳』や『地勢図帳』には掲載されていないシベリア諸地域の地図（カムチャツカ図、クングール図など）、その他のヨーロッパ製のシベリア図の複写図、中国図、トボリスクおよび周辺の村々の地図、トボリスク軍政官やシベリア総督などの名前入りの樹木図、カメンスキー工場の見取り図や機械図などである。『公務の地図帳』には、『シベリア地図帳』21や23に類似するシベリア図はない。『地勢図帳』のようなシベリアの各河川の地勢図類もない。一方、『公務の地図帳』には、『シベリア地図帳』や『地勢図帳』とは異なり、レーメゾフの業務に関わる年表や業務内容の記述が膨大に存在する。つまり、『公務の地図帳』はシベリア地域を描いた地図帳という側面だけではなく、レーメゾフの携わった業務や生涯について明らかにするための一次史料としても大きな価値があるといえる。ここに収められている地図類の複写年代は、『シベリア地図帳』の完成後であり、1702年以降と推定されている⁽⁴¹⁾。また『公務の地図帳』における最後の記述は、ゴリデンベルクによれば、息子のレオンティによるシベリア総督の記述であり、1730年と推定されていた⁽⁴²⁾。しかし複製本によれば、1730年以降の記述も存在し、地図帳の完成年代の確定はできていない⁽⁴³⁾。『公務の地図帳』を分析することは、先行研究ではあまり注目されていなかった『シベリア地図帳』完成後の18世紀前

半におけるレーメゾフの業務と地図作製の関係を明らかにすることにもなる。

以上、レーメゾフ作製の三冊の地図帳について、まずは作製目的や史料の性格が異なること、次に地図帳の作製年代が異なること、さらに掲載地図の内容が異なることの三点について確認した。このなかでも、『公務の地図帳』はもっとも後年に編集されたと推定される地図帳であり、他の二冊には存在しない地域情報が盛り込まれている。これは、レーメゾフとその息子達が作製した地図帳に表現された彼らのシベリア地域像の変化を明らかにするうえで、最も適した史料であると思われる。そこで次章では、『公務の地図帳』を中心に検討をすすめる。

II レーメゾフの『公務の地図帳』の構成と内容

(1) 『公務の地図帳』の構成

『公務の地図帳』の構成は第一部と第二部に分かれている。第一部がシベリア地域の地図帳であり、第二部はレーメゾフが1703年～1704年に従事したカメンスキー工場の業務に関わる図面およびトボリスクやトボリスク郡の都市計画や建築図面が中心である。第一部の序文にはレーメゾフと息子達が1697年にシベリア図、1698年に『シベリア地図帳』の勅令を受け、地図編纂を開始したことが書かれており、さらに目次が続く。目次には76枚の地図が書かれている。しかし、実際には全部で45枚の地図が掲載されている(第1表)。目次に挙げられているタイトルや地図もあるが、実際には掲載されていない地図やそもそも目次に挙げられていない地図も存在する⁽⁴⁴⁾。目次の後は、トボリスクの歴史やトボリスク軍政官の名前、シベリア各都市の印章などに関する記述があり、レーメゾフの地図作製も含めた業務についての詳細な説明がある。その後続いて45枚の地図が掲載されている。第一部の最後には、再びレーメゾフの業務についての年表がある。

(2) 『公務の地図帳』掲載地図の分類

『公務の地図帳』第1部に掲載されている45枚の地図をその内容で分類した(第1表)。

a. トボリスクの地図群

1は1709年のトボリスク軍政官の勅令によるトボリスクの下町地区の測量調査の付図である。2はトボリスクから20ベルスタ離れた地点を示した地図、3はトボリスクの山手・下町全体の俯瞰図である。4は1697～1698年の石造建築物建設のためのトボリスク中心部の図面である。6は1709年4月27日の勅令にもとづいたトボリスク政庁の建物の図面である。7は1625年以降のトボリスク周辺を拠点とする先住民族のデータをもとに作製した地図である。これは、トボリスクを中心に同心円状に周辺地域の集落や河川・森林などの自然環境を描いたものであり、トボリスクを周辺の先住民族からの攻撃を防衛するための軍事的な地図であると思われる。

b. シベリア地域図

これらの地図は、レーメゾフと息子達がモスクワのシベリア庁から1700年にトボリスクに持ち帰った「シベリア各地域の都市図24枚」⁽⁴⁵⁾から写したものが主であり、『シベリア地図帳』の掲載図と同様の地図がほとんどである。シベリアの主要河川沿いに建設されたロシア人の拠点であるタラ、チュメニ、トゥリンスク、ベルホトゥリエなどの都市と周辺地域を描いた地図である。しかし、35のネルチンスク、36、37のヤクーツクの地図は『シベリア地図帳』と若干異なる。22、23のクングールの地図は『シベリア地図帳』にはない。22のクングール都市図については何の説明書きもないが、23のクングール地域図には説明書きがある。それによれば、レーメゾフは息子のレオンティと共に1703年4月12日の勅令によりベルホトゥリエからクングールへの調査に赴いた。その調査をもとにこの地図を描いた。しかし、クングールの地図については、すでに1700年1月

第1表 『公務の地図帳』第一部所収の地図一覧

Table 1. The list of maps in part of *Working Sketchbook* by Remezov

分類	図のタイトル	地図番号 (лист)	地図の内容	原本・複写の種類 他の地図帳掲載図との比較	
1 a	勅令に基づいた全建築物のための下町測量図	Л. 10о6-11	トボリスク山手・下町の全体図	1709年の調査付図複写元はЧК1のトボリスク図の下図か	
2 a	トボリスク周辺の20ベルスタ四方見本図	Л. 15о6	トボリスク周辺図	複写元はЧК1のトボリスク図の下図か	
3 a	主要建設基準図	Л. 18о6-19	トボリスク山手・下町の全体図	複写元はЧК1のトボリスク図の下図か	
4 a	石造建築のための測量図	Л. 20о6-21	トボリスク中心部	◎複写元は1697~1698年作製図	
5 g	モスクワ公国および国家とその周辺図	Л. 22о6-23	タルタリア図、モスクワとシベリア・中央アジア方面	複写元は1549年作製のヘルベルシュタインのタルタリア図◆	
6 a		Л. 25	トボリスクのクレムリン内の地図	1709年作製図※	
7 a	トボリスク防衛図	Л. 26о6-27	トボリスクとその周辺図、同心円状の距離線あり	1625年以降のデータをもとにした作製図か※	
8 g	トボリスク地方図	Л. 28о6-29	トボリスクを中心とした西シベリア全体図	◎複写元は1697年に作製されたレーメゾフのトボリスク地方の図	ЧК2
9 g	古代シベリア全図	Л. 30о6-31	シベリア全図	複写元は1667年のゴドゥノフ図	
10 g	アンドレイ・アンドレーヴィッチ・ヴィニウス図	Л. 32о6-33	シベリア全図	◎複写元は1680~1683年作製のヴィニウス図	
11 d		Л. 44о6-45	トボリスク、トボル川上流域図	◎1710~1712年の人口世帯調査付図※	
12 e		Л. 47	トボル川とミヤス川上流域図	◎1710年のパルフェニエフの調査付図※	
13 e		Л. 47о6-48	トボリスク、トボル川上流域図、トボル川各支流の上流部分まであり	◎1710年のパルフェニエフの調査付図※	
14 g	実際の測量で作製した論争におけるバシキールの村々の境界図	Л. 49о6-50	トボル川上流域図	複写元は1694年~1695年作製図、XK165のタイトルは「イセチ村の図」	XK165
15 g	経験豊富な土地生まれの人々による水の乏しい河川の全図	Л. 51о6-52	トボル川上流部分 現在のカザフスタン北部、アラル海、アルタイ	複写元は1697年作製のカザフ・オルダの図、ЧК20のタイトルは「水の乏しい通行しがたい山地のステップ地域の全図」	ЧК20、XK163
16 f	竜騎兵隊長の遠征による遠隔地の地図	Л. 53о6-54	トボリスク、トボル川上流域図	◎1700年のメイナの調査付図	
17 f	竜騎兵隊長の遠征による村々の地図(チュムリヤツカ村の地図)	Л. 55о6-56	トボリスク、トボル川上流域図	◎1700年のメイナの調査付図	
18 b	タラとその地方図	Л. 57о6-58	イシム川、タラとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК3、XK166о6
19 b	チュメニとその地方図	Л. 59о6-60	トゥラ川下流、チュメニとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК4、XK166
20 b	トゥリンスクとその地方図	Л. 61о6-62	トゥラ川上流、トゥリンスクとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК5
21 b	ベルホトゥリエとその地方図	Л. 63о6-64	トゥラ川上流、ベルホトゥリエとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК6
22 b	クングルと下町の図	Л. 65о6-66	クングル図 クレムリンと下町部分	◎1703年の調査付図、複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	

23	b	クングールとその地方図	JI. 67o6-68	カマ川上流, クングールとその周辺図	◎複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	
24	g	首都周辺からサラベツキ海峡までの大ベルミ, 白海沿岸, ドヴィンスクの新地図	JI. 71o6-72	ベルミ, ボルガ川, 北極海沿岸まで	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図か?	ЧК 22
25	b	ベリョーゾボとその地方図	JI. 73o6-74	オビ川, ベリョーゾボとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 8. XK 167
26	b	スルグトとその地方図	JI. 75o6-76	オビ川, スルグトとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 9
27	b	ナルイムとその地方図	JI. 77o6-78	オビ川, ナルイムとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 10
28	b	トムスクとその地方図	JI. 79o6-80	オビ川上流, トムスクとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 11 XK 168
29	b	クズネツクとその地方図	JI. 81o6-82	オビ川上流, クズネツクとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 12 XK 168o6
30	b	トゥルハンスクとその地方図	JI. 83o6-84	マンガゼヤ, トゥルハンスクとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 13 XK 169
31	b	エニセイスクとその地方図	JI. 85o6-86	エニセイ川, エニセイスクとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 14
32	b	クラスノヤルスクとその地方図	JI. 87o6-88	エニセイ川上流, クラスノヤルスクとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 15
33	b	イリムスクとその地方図	JI. 89o6-90	アンガラ川, イリムスクとその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 16
34	b	イルクーツクとその地方図	JI. 91o6-92	アンガラ川, イルクーツク, バイカル湖とその周辺図	複写元は1700年にシベリア庁から持ち帰った地図	ЧК 18
35	b	ネルチンスクとその地方図	JI. 93	アムール川支流, ネルチンスクとその周辺図	ЧК 19の地図と類似はしているものの, 若干図像が異なるため, そのままの複写ではない	
36	b	ヤクーツクとその地方図	JI. 95o6-96	レナ川, ヤクーツクとその周辺図	ЧК 17の地図と図像が異なるため, そのままの複写ではない	
37	b	ヤクーツクとその地方図	JI. 97o6-98	レナ川, ヤクーツクとその周辺図	ЧК 17の地図と図像が異なるため, そのままの複写ではない	
38	c	カムチャダールの海陸新地図	JI. 99o6-100	シベリアの東端とカムチャツカ半島	◎作製年代もデータも諸説あり, 複写元は1701年のクバツフの編集図か	
39	c	カムチャダールの地方新地図	JI. 101o6-102	シベリアの東端とカムチャツカ半島	◎複写元は諸説あり, 1707~1709年頃の作製図か	
40	c	カムチャダールの海陸新地図	JI. 102o6	カムチャツカ半島	◎作製年代は諸説あり, 1712~1714年頃の作製図か※	
41	c		JI. 103o6-104	カムチャツカ半島	◎1712年以降, コズイレフスキーがヤクーツクに送った地図をもとにレーメゾフが作製※	
42	h	中国図	JI. 105o6-106	中国図	◎複写元は1692年のウィットセンの地図◆	
43	h	タルタリア, ハーン国とその地方図	JI. 107o6-108	シベリアと中国国境地帯	◎複写元は1692年のウィットセンの地図◆	
44	h	中国図, その行政区画と都市	JI. 109o6-110	中国図	◎複写元は1686年のフィリップ・コプレーの地図◆	
45	h	シナ帝国新図	JI. 111o6-112	東アジア図, 中国, 朝鮮半島, 日本	◎複写元は1655年のマルティエニの地図◆	

分類 a~h は, 本文Ⅲ(1)に対応している。地図番号 (лист) は『公務の地図帳』原本の番号である。

(凡例) ЧК『シベリア地図帳』 XK『地勢図帳』 СК『公務の地図帳』

◎『公務の地図帳』のみに掲載されている地図 ◆複写元の地図が出版図 ※レーメゾフの筆跡による地図 (本文注(70)参照)

に持ち帰ったシベリア地図のなかにもあり、それをもとにしたことが書かれている⁽⁴⁶⁾。

c. カムチャツカ図

『公務の地図帳』のみに掲載されており、他の地図帳にはない地図である。38の図は、説明書きによれば、1701年8月18日のトボリスク軍政官の命令にもとづいたクバソフ(Кубасов, В)のカムチャツカ遠征の際の地図である⁽⁴⁷⁾。「1695年」のアトラソフ(Атласов, В)⁽⁴⁸⁾のデータに基づいた地図であると書かれている。39~41に説明書きはないため、『公務の地図帳』のみでは作製年代はわからない。これらの地図の作製年代や地図情報については先行研究があるので後述する。

d. 人口調査の付図

この地図群は、1710年~1712年にかけて行われたトボリスク郡・チュメニ郡の人口世帯調査の付図である。44裏~45にかけて掲載されている11の地図の前、34~36にかけては身分・職業別に人口世帯調査の結果が記録されている。その後37頁からはレーメゾフのモスクワのシベリア庁での業務やトボリスクでの業務についての説明がある。40~44にかけてはトボル川流域の諸河川の村々別の調査結果があり、最後に11の地図が付図として掲載されている。

e. パルフェニエフ(Парфеньев, Л. И)の調査地図

12, 13はモスクワから派遣されたパルフェニエフによる業務の調査結果とその付図であり、いずれもトボル川流域の詳細な地図である。特にこの調査では、トボル川上流域におけるバシキール、タタールについての調査が求められている。13の地図は、他の地図よりもさらにトボル川上流のウイ川までを範囲とし、ロシア人の町や村の記載のみではなく、先住民族のユルタ(遊牧民の天幕)が詳細に記されていることに特徴がある。

f. 竜騎兵隊長メイナ(Менна, Д. Я)による地図

16, 17ともにトボリスクからトボル川およびその支流の地図であり、1700年10月2日の勅令によって行われた、ロシア軍の竜騎兵隊による、トボル川・ミアス川沿いの村々についての調査に関する地図である。説明書きには、拠点となるロシア人の村から村への距離の記載が詳細に書かれており、地図上に各村々が示されている。なお、dの地図群とeの地図群の間に、14のバシキール地方の図と15の地図(『シベリア地図帳』20と同じ)があり、これも同じトボル川上流域を描いたものでもある。d・e・fの地図群は、『公務の地図帳』のみに掲載されている地図である。

g. シベリア全図およびシベリア部分図

これらの地図は、すでにロシア地図史の研究史上では有名な地図が多い。5の「モスクワ公国および国家とその周辺図」は、ヘルベルシュタイン作製の1549年(1556年出版)の地図の写しである。8の地図は、1696年~1697年のデータをもとに作製された「トボリスク地方の図」(『シベリア地図帳』2)⁽⁴⁹⁾である。9の地図は1667年の「ゴドゥノフ図」、10は1680~1683年の作製年代と推定されている「ヴィニウス図」、14は1694~1695年作製のバシキール図(『地勢図帳』165と同じ)、15は1697年3月作製の「カザフ・オルダの図」、24は「大ペルミ図」(『シベリア地図帳』22と同じ)である。いずれの地図も、『公務の地図帳』作製の際に複写したものであると思われる。

h. 中国図

これらも『公務の地図帳』のみに掲載されている地図であるが、すべてヨーロッパ製の出版図の写しである。42と43の地図は、いずれも1692年にウィットセンが出版した『北東タリタリア』に収録されている地図の複写である。これは、アムステルダムで1663年に出版されたブラウの『世界の舞台』に掲載された地図を、ウィットセンが収録したものである⁽⁵⁰⁾。44の地図の原本は、

1686年のフィリップ・コプレーの中国図であると思われる⁽⁵¹⁾。この地図には、中国内の15地方と155の都市が示されている。45は、マルティエニが出版した「シナ帝国新図」(1655年刊)の複写と思われる⁽⁵²⁾。これは中国製の「広輿図」をもとにヨーロッパで最初に出版された『中国地図帳』に掲載された中国図であり、17世紀後半の出版図における最新情報ともいえる。地図の説明書きによれば、1669年にトボリスクのゴドゥノフ軍政官が編纂した「中国国家の目録」をモスクワのシベリア庁に送ったことが書かれている⁽⁵³⁾。

『公務の地図帳』第一部の掲載図の概要について述べた。この掲載図のほとんどは複写図である。そこで、複写元となった地図に関して複製本の地図やその説明書きなどから推定し、表1に示した。『公務の地図帳』に掲載された手書きの地図は、多くはその複写元である地図も手書きの一枚物の地図であることが考えられる。当時の出版図からの複写は、5のヘルベルシュタインの地図、42~45の中国図のみである。地図の形態や作製経緯を分類すると、第一にレーメゾフ自身が過去に作製した地図⁽⁵⁴⁾の複写(1~4, 8, 15)、第二に『シベリア地図帳』編纂のために、モスクワのシベリア庁から持ち帰った地図の複写(14, 18~34)、第三に『シベリア地図帳』編纂後に、すでに存在する地図に新しい情報を加味して書き加えたとと思われる地図(35~37)、第四に『シベリア地図帳』編纂後に本地図帳作製のために新しく書きとめられた地図(12, 13, 16, 17, 38, 39)、第五にレーメゾフが『公務の地図帳』作製時点で新たに作製したと思われる地図(6, 7, 11, 40, 41)である。また、説明書きの部分に村から村の距離が示されている地図は、6, 7, 11~13, 15~17であり、他の地図に比べて大縮尺の地図である。トボリスクおよびトボル川流域の地図群は、当該地域を描いた最新情報の地図であったと思われる。

Ⅲ 『公務の地図帳』からみたシベリア地域像

(1) シベリア地域像の拡大

『公務の地図帳』の掲載図と『シベリア地図帳』および『地勢図帳』の掲載図はすべて同じ地図ではない。この三冊の地図帳のなかで、『公務の地図帳』のみに掲載された地図を示した(第1表◎参照)。『シベリア地図帳』編纂以後、レーメゾフが従事した業務に関係する地図(6, 11~13, 17~18, 22~23, さらに『公務の地図帳』第二部すべての図面)とそれ以外の地図(5, 7, 10, 38~45)に分けられる。

『シベリア地図帳』を提出した1701年以降、レーメゾフが関与した業務は、主に1704年~1712年のトボリスク町内の測量や石造建築に関わる業務、1703年のクングールへの派遣、1703年~1704年のカメンスキー工場への派遣、1710年~1712年のトボリスク郡・チュメニ郡の人口世帯調査が挙げられる。それぞれの仕事に関わる地図や図面が『公務の地図帳』には掲載されており、他の二冊の地図帳に比べて、当該地域の地域情報が充実したことが特徴として挙げられる。しかも、これらは『公務の地図帳』作製時点におけるレーメゾフによる手書き図であることから、貴重な情報でもあったことが推察される。これらの業務以外の地図として、筆者が特に注目したい地図群はcとgである。『シベリア地図帳』21および23のシベリア全図にもカムチャツカや中国部分の描写はあるものの、当該地域のみをこのように数枚にわたるかたちでの掲載はしていない。

また『公務の地図帳』掲載図のなかで『シベリア地図帳』あるいは『地勢図帳』にも類似の地図が掲載されている場合がある。そのなかでも、地図が複製かどうか、あるいはそっくりそのままの複製ではないけれども同じ地図を原本とするバリエーションかどうかという点に注目したい。これは、同じ地域を描いている地図でも、地図内の情報が更新されているあるいは表現が異なる場合がある

からである。『公務の地図帳』の掲載地図が『シベリア地図帳』の掲載図と図像がまったく同じ地図は、8, 15, 18, 21, 24~30, 32~34である。一方、同じ地図を原本とするバリエーションながらも若干表現や情報が異なる地図は、1, 3, 19, 20, 31, 35~37である。なかでも著しく情報の更新がなされているものは、35のネルチンスクの地図、36, 37のヤクーツクの地図である。これは、『シベリア地図帳』編纂以後、『公務の地図帳』の作製段階において、当該地域の情報がより充実したものになったと考えられる。さらに『公務の地図帳』の掲載図のなかでも、同じ地域を描いているものの、作製年代の異なる数枚の地図が掲載され、作製年次が下るごとに地域情報が更新されている場合がある。たとえば、11~17までのトボル川流域を描いた地図群、38~41のカムチャツカ図群である。これらの地図群は、前述したように、『公務の地図帳』のみに掲載されている地域の地図である。

これらのことから、『公務の地図帳』第一部の地図帳部分において、第一にウラル山脈周辺のクングールやカメンスキーに関する情報を盛り込んだこと、第二にトボリスクの南方であるトボル川とその支流の西シベリア南部に関する地域情報を更新させて充実させたこと、第三に東方のカムチャツカ半島や中国国境地帯および中国関連の地図情報を盛り込んだことの三点が指摘できる。

そこで、三冊の地図帳の掲載図から、それぞれの地図帳が描く範囲と地域構成を見よう。(第2表、地名や河川名は第1図・第2図参照)。いずれも、現在の地域区分である西シベリアを中心に、東シベリアから極東までを地図帳の範囲としていることは共通している。シベリア庁に提出された『シベリア地図帳』の描いている地域を基準に考えると、『公務の地図帳』と『シベリア地図帳』が範囲とする地域は類似しており、『地勢図帳』は、他の二冊に比べて、西シベリア地域の都市や河川流域ごとの詳細な地図がより多く掲載されている。そのなかでも、明らかに『公務の地図帳』が描くシベリア地域が、他の二冊の地図帳

よりもシベリアの範囲をカムチャツカ半島という東方へと拡大させている様子がわかる。

(2) フロンティアの地域像

『公務の地図帳』が表現するシベリア像を特徴づけているのは、『公務の地図帳』第一部のみに掲載されている地図群である。11~17までのトボル川流域を描いた地図群、38~41のカムチャツカ図群、42~45の中国図群である。さらには第二部に掲載されているカメンスキー工場の図面である。しかし、第二部は地図帳ではなく、工場の機械の図面などが主であり、第一部のみが他の2冊の地図帳と同じレベルで比較でき得る地図帳である。そこで本節では、トボル川上流域やカムチャツカ、中国という南方および東方への地域像の拡大を物語る地図の図像表現の特徴について述べていく。地域像の違いに着目することから、主に地図の表現方法に注目する。

11~13および16, 17のトボル川上流域の図は、前述したように、『公務の地図帳』にある説明書きによって作製目的も作製年代も明確である。14も同じ地域を描いた地図であるが、その複写元となった地図の作製年代は1694年~1695年にかけてと若干古い。15の地図は、レーメゾフが1697年に作製した地図の複写であり、その描く範囲内にトボル川流域もある。そのため、11~17にかけては、地図帳の頁をめくると同地域を比較できる構成になっている。水系・水路網を中心とした全体の図像構成は『地勢図帳』に掲載されている地図と類似している。しかし、『地勢図帳』には地図全体に距離を示すグリッドがあり、『公務の地図帳』の地図にはない。地図の方角は南を上としている。11では、トボリスクから東方のバガイ川・イシム川と南方のトボル川流域が描かれている。トボル川沿いは、タウダ川・テュラ川・イセチ川と各支流の上流がウラル山脈まで描かれている(第3図)。13ではトボル川支流のイセチ川とその南方が描かれ、トボル川上流の支流であるウイ川沿いが詳細に描かれている(第4図)。これは他の地図には見られない。14はトボル川支

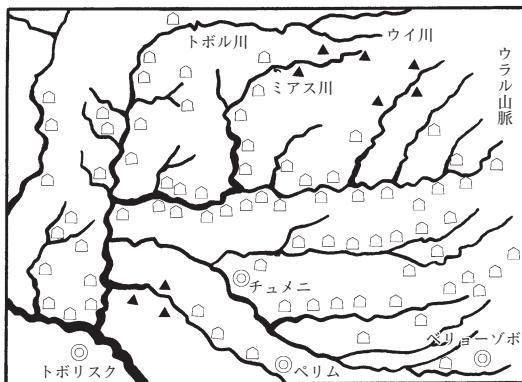
第2表 各地図帳所収の地図と描かれている地域
Table 2. The areas mapped in books by Remezov

シベリア全体	ウラル	西シベリア	中央アジア	東シベリア	極東	中国・中国国境地帯
5, 9, 10 公務の地図帳	クングール (22, 23), ペルミ (24)	トボリスク (1・2・3・4・6・7), 西シベリア (8), タラ (18), チュメニ (19), トウリンスク (20), ベルホトゥリエ (21), ベリョーゾボ (25), スルグト (26), ナルイム (27), トムスク (28), クズネツク (29) トボル川流域 (11・12・13・14・16・17)	15	マンガゼヤ・トゥルハンスク (30), エニセイスク (31), クラスノヤルスク (32), イリムスク (33), イルクーツク (34), 20 マンガゼヤ・トゥルハンスク (13), エニセイスク (14), クラスノヤルスク (15), イリムスク (16), イルクーツク (18)	ネルチンスク (35), ヤクーツク (36・37), カムチャツカ (38・39・40・41)	中国 (42・44), 中国国境地帯 (43), 東アジア (45)
21, 23 シベリア地図帳	ペルミ (22)	トボリスク (1), 西シベリア (2), タラ (3), チュメニ (4), トウリンスク (5), ベルホトゥリエ (6), ペリム (7), ベリョーゾボ (8), スルグト (9), ナルイム (10), トムスク (11), クズネツク (12)	20	マンガゼヤ・トゥルハンスク (13), エニセイスク (14), クラスノヤルスク (15), イリムスク (16), イルクーツク (18)	ネルチンスク (19), ヤクーツク (17)	
4, 16206 地勢図帳		トボリスク (161・16306・164), トボリスク周辺 (162), 西シベリア一部 (16506), チュメニ (166), タラ (16606), ベリョーゾボ (167), トムスク (168), クズネツク (16806) トボル川流域 (165), トボル川 (11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23), ミアス川 (24・25・26・27), ニッツェ川 (28・29), イセチ川 (30・31・32・33・34・35・36・37), プシマ川 (38・39・40・41・42・43・44・45・46), トウラ川 (47・48・49・50・51・52・53・54), ダウダ川 (55・56・57・58・59・60・61・62), コンダ川 (63・64・65・66), イルティシ川 (64・65・66・67・68・69・70・71・72・73・74・75・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89・90・91・92・93・94・95・96・97・98・99), バガイ川 (101・102・103・104・105・106), イシム川 (107・108・109・110・111・112), オビ川 (116・117・118・119・120・121・122・123・124・125・126・127・128・129), トム川 (130・131)	ブハラ (113), 163	マンガゼヤ・トゥルハンスク (169) エニセイ川 (133・135・136・137・138・139・140・141・142), ツングスカ川 (134), アンガラ川 (143), イリム川 (144), ハイカル湖 (145), セレンガ川 (146) ダウール川 (147), アムール川 (149・150), レナ川 (153・154・155・156・157), アルダン川 (158), オリョクマ川 (159), コルイ川 (160)	中国 (151)	

『公務の地図帳』の()内は第1表の番号を示す。『シベリア地図帳』と『地勢図帳』の()内は各原本の示す地図番号である。

流の自由村やユルタが描かれ、主にイセチ川とその支流であるミアス川などが詳細である（第5図）。

次に、各地図における凡例の描き方について注目すると、11では主にロシア人の町や自由村⁽⁵⁵⁾が他の地図よりも大きく描かれており（第3図）、13ではそれだけではなく、先住民族のユルタがウイ川沿いに目立つ（第4図）。11とは異なり、トボル川流域の自由村は凡例のみで地名記載は省略されている。14では、町や自由村、ユルタなどの凡例は朱書きされて数多く描かれている。しかし、凡例の大きさは他の二図に比べると小さい（第5図）。これらのことから、11で強調されているのは、トボリスクから南方のトボル川とその支流のロシア人の町や村々であることがわかる。13では、他の地図にはないウイ川沿いのユルタが図像表現として強調されている。一方、両者に比べて14では、イシム川沿いのロシア人の町や自由村、ユルタは詳細に描かれているものの、図像としては他の二図ほどは強調されていないとい



◎ ロシア人の町 (город)

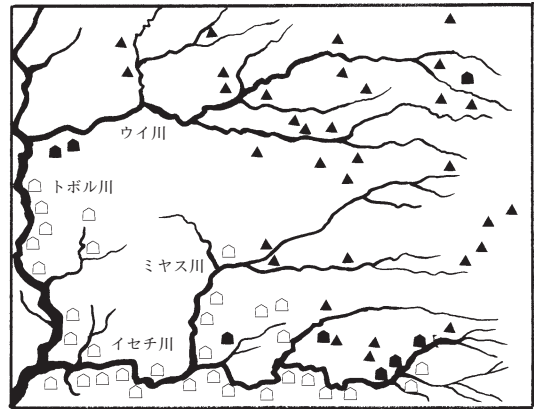


□ ロシア人の自由村 (слобода)



▲ 先住民族のユルタ (юрты)

第3図 11の地図と図像表現（図番号は第1表による）
Figure 3. Representation of the region in map
No. 11



□ ロシア人の自由村 (слобода)

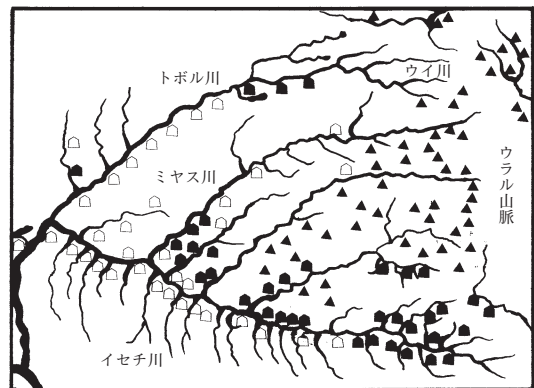


■ ロシア人の村 (деревня)



▲ 先住民族のユルタ (юрты)

第4図 13の地図と図像表現（図番号は第1表による）
Figure 4. Representation of the region in map
No. 13



□ ロシア人の自由村 (слобода)



■ ロシア人の村 (деревня)



▲ 先住民族のユルタ (юрты)

第5図 14の地図と図像表現（図番号は第1表による）
Figure 5. Representation of the region in map
No. 14

える。これらの地図におけるロシア人集落と先住民のユルタの図像表現から言えることは、当該地域は、ロシア人にとってのフロンティアであり、地域像を描くうえで、ロシア人と先住民の分布が重要な情報となっていたことが窺える。そして、作製年代が下るにしたがって、フロンティアもより南方にすすみ、当該地域におけるユルタの分布調査も詳細になっていたことがわかる。

38～41のカムチャツカ図では、38は作製年代や用いられた情報について説明書きがあるものの、39～41については何も書かれていない。しかし、これらの地図の作製年代や作製者・情報提供者には、38も含めてゴリデンベルク⁽⁵⁶⁾、アンドレーエフ⁽⁵⁷⁾、エフィーモフ⁽⁵⁸⁾による先行研究がある。38の『公務の地図帳』の説明書きを読むと、「203年」(西暦1695年に該当)のアトラソフによる成果をもとにしたクバソフが用いた地図とある⁽⁵⁹⁾。しかし、「1695年」はアトラソフがヤクーツクからアナディリ要塞に司令官として派遣された年である。アトラソフが60人の軍事勤務者と狩猟民、60人のヤサク・ユカギールを連れて、カムチャツカ征服に出発したのは1697年春であり、1699年7月にアナディリに戻ったため⁽⁶⁰⁾、その情報を用いたとするならば、1695年は記載間違いであろう。そして、この『公務の地図帳』に掲載されている地図そのものは、レーメゾフの息子であるイワンによる複写図で1702年以後の作製図であるとゴリデンベルクは推定した⁽⁶¹⁾。しかし、アンドレーエフは、この地図をヤクーツク軍政官であるトラウルニフト(Траурнихт, Д. А.)による地図⁽⁶²⁾とし、エフィーモフは1701年にクバソフによって編集された地図⁽⁶³⁾としている。筆者にはこれらの先行研究に新しい知見を加えるだけの証拠も新説もないが、『公務の地図帳』にある「203年」の「アトラソフのデータによるクバソフの地図」という記載が正しければ、エフィーモフの説がもっとも妥当であると思われる。また、ゴリデンベルクによれば、39はヤクーツクのトラウルニフト軍政官によって送られた1702～1709年頃のデータをもとに1707～1709年頃にトボリ

スクにおいて作製された地図⁽⁶⁴⁾、40は1712～1714年頃以後の作製⁽⁶⁵⁾、41はコズイレフスキー(Козыревский, И)のカムチャツカ探検による成果の地図であり、作製年代はそのクリル諸島の描写内容から1713年以後と推定されている⁽⁶⁶⁾。一方、アンドレーエフとエフィーモフは40の地図をトラウルニフトによる地図とし、39には誰によるデータのものかは述べていない⁽⁶⁷⁾。41はゴリデンベルク同様、コズイレフスキーのデータをもとにした地図としている⁽⁶⁸⁾。

次に、この4枚のカムチャツカ図の図像構成や特徴を比較する。38、39はレーメゾフが描くシベリア全図のように南が上、左の端にカムチャツカ半島を描いている。38よりも39のほうが書き込まれている情報は多い。さらに40、41となると、カムチャツカ半島がクローズアップされ、半島内部の情報がさらに充実し、「日本」まで描かれている。40は北が上、41は西が上である。なお、『シベリア地図帳』の第21図と第23図のシベリア全図にあるカムチャツカ部分を見てみると、前者は「島」として描かれており、後者はかろうじて半島らしき形をしている。また、『地勢図帳』のシベリア全図においても、少し突出した半島らしき部分にいくつかの河川名が書き込まれている程度である。つまり、『公務の地図帳』におけるカムチャツカ図は、ロシアにおける最新の地域情報をその図像に表現しているといえる。カムチャツカ図のなかでもっとも後年に作製されたと推定される41の地図は、前述したように、コズイレフスキーのデータによって作製されたものとしてロシア人研究者の見解は一致しており、当時としてはその図像のなかに最新の豊富な地域情報を盛り込んでいたものであった。

最後に「中国図」の特徴について述べる。43～45の中国図はすべてヨーロッパ製の出版図からの模写である。原本通りの方角(北が上)での複写は、44のブラウの地図のみであり、43、45は南が上、44は西が上となっている。一方、『地勢図帳』に描かれている「中国図」は、北京の描き方やロシア極東部分の描き方が、従来のレーメゾフ

によるシベリア図の描き方と類似することから⁽⁶⁹⁾、ヨーロッパ製地図の複写ではないと考えられる。この地図に関しての先行研究はないが、おそらくトボリスクやモスクワのシベリア庁で手に入る地図や地域情報を利用して複写・編集したものであろう。レーメゾフが『公務の地図帳』において、ヨーロッパ製の中国図を模写した明確な理由はわからないが、図像表現の点では詳細に地域情報を盛り込んだかたちをしており、ヨーロッパ製の出版地図のほうがより進んでいたからであると思われる。

以上のことから、『公務の地図帳』において、レーメゾフとその息子達が、シベリア地域像を東方に拡大させただけでなく、地図帳内の同地域を描いた地図においても、作製年代が下るに従って図像表現に違いが見られ、地域情報の詳細な部分が異なっていたことが明らかになった。つまり、ロシアの植民地フロンティアの進展にともない、『公務の地図帳』に表現された地域像にも変化がみられることがわかった。

おわりに

本稿では、三冊のレーメゾフの地図帳のなかでも、もっとも後年に編集された『公務の地図帳』を中心に、三冊の地図帳の作製目的や掲載地図の違いを踏まえたうえで、そこに描かれたレーメゾフの地域像を明らかにした。従来の研究では、レーメゾフの地図帳所収の地図については、それぞれの地図帳の作製意図やそこに集成されている地図の特徴の差異などは、明確に意識されることはなかった。しかし本稿では、それぞれの地図帳の史料としての性格の違いを踏まえたうえで、地図の作者であるレーメゾフおよびその息子達によるシベリア地域像の特徴を、地図帳の描く範囲と地図の図像から論じた。

本稿で対象とした18世紀初期の手書きの地図帳に掲載された地図の多くは、手書きの一枚物の地図が編集され、集成されたものであった。また、地図帳自体もシベリア庁やレーメゾフ家に私的に

保管されたものであり、出版図や出版された地図帳に比べて、その描かれた地域情報が多くの人々に知れ渡らない。しかし、国家や権力者にとって、重要な地域情報を独占的に掌握するうえでは都合が良いと思われる。これは、ある社会における地図の役割を考えるうえで重要な意味があると考えられる。また、国家が近代的な測量図を整備していく前段階においては、すでに作製された様々な地図をもとにした編集図が一般的であった。しかし、近代的な測量技術は発展していなかったものの、実際に現地を踏査し、詳細な情報収集を行って地図を作製し、それをもとに地図の編集を行うことは行われていた。それを可能にしたのは、18世紀初期のロシアにおいては、ロシアによるシベリア支配システムの構築によるものが大きかったと思われる。つまり、シベリアにおいては、軍事勤務者というシベリアの各地域の調査業務に携わった人々がいたからこそできたものといえる。

本稿で対象としたレーメゾフは、ロシアのシベリア支配の現地業務を担った軍事勤務者であり、その祖父・父・息子達も同様の業務に携わっていた家系である。このレーメゾフ一族による地図作製は、トボリスクというシベリア現地の情報収集にもっとも適した場所において行われた。18世紀初期におけるレーメゾフの地理的認識こそが、ロシアがシベリアに対してもつ地理的認識の集大成でもあったといえる。その後、ピョートル1世の政策の一環として、1720年の勅令により、ヨーロッパから輸入した測量技術による地図の整備が実施された⁽⁷⁰⁾。それ以降は、ロシアの地図帳は近代的な測量技術を伴ったものとなった。具体的には、1734年のイワン・キリーロフによる『全ロシア帝国地図帳』、1745年のロシア科学学士院による『ロシア帝国アトラス』という近代的アトラスへと発展していく⁽⁷¹⁾。レーメゾフの描いたシベリア地域像は、これらアトラスの描くヨーロッパから導入された「近代的な」地域像のまさに前段階に位置していた。つまり、その図像表現なども含めて、ロシアによる「伝統的な」シベリア地域像を表していたともいえる。

本稿では、レーメゾフの三冊のシベリア地図帳に掲載された個々の地図に関する詳細な検討は課題として残された。特にⅡで示した『公務の地図帳』掲載の各地図群における個々の地図の分析については稿を改めて論じたい。また、後世におけるロシアの地図作製において、レーメゾフの地図帳や地図がそれらに及ぼした影響についても検討する必要がある。今後の課題としたい。

(付記) 本稿で利用した史資料・文献の収集には、平成20～23年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「17～19世紀におけるロシア帝国のシベリア・極東の地域像」(研究代表者：米家志乃布(法政大学))を使用した。

注

- (1) ①Baddeley, J. F. *Russia, Mongolia, China. vol. I.* London, 1919. ②Bagrow, L. *A history of Russian cartography up to 1800*, Ontario, 1975. ③Андреев, А. В. *Очерки по источниковедению Сибири Вып. I. XVIIвек.* Москва. 1960 ④Ефимов, А. В. *Атлас географических открытий в Сибири и Северо-Западной Америке XVII-XVIIIвв.* Москва. 1964. ⑤Греков, В. И. *Очерки из истории русских географических исследований 1725-1765гг.* Москва. 1960. ⑥Фель, С. Е. *Картография России XVIIIв.* Москва. Геодезиздат. 1960. ⑦Полевой Б. П. 'К истории формирования географических представлений о Северо-Восточной оконечности Азии в XVIIв.' *Сиб.геогр. сб. Т. 3.* Москва.1964. С. 224-270. ⑧Шибанов, Ф. А. *Очерки по отечественной картографии.* Ленинград. 1971.
- (2) Постников, А. В. *Развитие крупномасштабной картографии в России,* Москва, 1989.
- (3) Постников, А. В. *Русская Америка в географических описаниях и на картах 1741-1867гг.* С-Петербург. 2000.
- (4) Псянчин, А. В. *Очерки истории этнической картографии в России XVIII-XIXвв.* Москва. 2004.
- (5) Кивелсонの研究では、シベリア図そのものの史料学的研究ではなく、地図の図像表現をもとにモスクワ公国を事例とした「国家」と「空間」の関係が論じられている。その際、ロシアが作製した様々な古地図を分析している。ロシア地図史に図像学的方法を取り入れた研究である。Kivelson, V. *Cartographies of Tsardom: The Land and its Meaning in seventeenth century Russia.* Cornell University Press, 2006.
- (6) ①三上正利「一七世紀のロシア製シベリア諸図」(歴史地理学会編『歴史地理学紀要Ⅳ アジアの歴史地理』古今書院, 1963年) 87-110頁。②同「1667年シベリア地図の目録原文の公刊」*人文地理* 15-6, 1963, 655-661頁。③同「1673年のシベリア地図」*人文地理* 16-1, 1964, 19-39頁。④同「スパファリのシベリア図」*史淵* 99, 1967, 39-76頁。⑤同「一六八七年のシベリア地図」(小牧実繁先生古稀記念会編『人文地理学の諸問題』大明堂, 1968年) 425-437頁。⑥同「レーメゾフの『シベリア地図帳(一七〇一年)』の第二一図」*史淵* 111, 1973, 199-239頁。⑦同「レーメゾフの『シベリア地図帳, 1701年』の民族誌地図」*歴史学・地理学年報*第2号, 1977, 5-20頁。
- (7) ①船越昭生『北方図の歴史』講談社, 1976. ②同『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』法政大学出版局, 1986.
- (8) 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会, 1999年。
- (9) セミョン・ウリヤーノビッチ・レーメゾフに関しては、①Гольденберг, Л. Д. *Семен Ульянович Ремезов: Сибирский картограф и географ, 1642-после 1720гг.* Москва. 1965. がもっとも詳しい。②Bagrow, L. 'Semyon Remezov-a Siberian cartographer', *Imago Mundi* XI. Stockholm, 1954. その他、日本語文献では、③清水守男「セミョーン・ウリヤーノヴィチ・レーメゾフ——シベリア地図作製者・最初のシベリア史家——」(中京大学社会科学研究所編『ロシアのシベリア進出史』成文堂, 2011) 147-180頁がある。
- (10) 1667年にトボリスクの軍政官ピョートル・ゴドゥノフが作製命令をだしたシベリア全図のこと。しかし、「ゴドゥノフ図」の原図は今日伝わっていない。
- (11) ピョートル1世の政策によるヨーロッパからの近代的なアトラス導入以前から行われていたシベリア図作製の集大成として、レーメゾフの地図帳が位置づけられている。前掲注(2)C. 28-31, 前掲注(7)②239-241頁参照。
- (12) ロシアの「民族地図」作製の流れは、「人種地図」作製の前段階ともいえる。「民族地図」「人種地図」作製史は大きく三段階ある。第一段階は、17世紀末から19世紀前半の民族分布と境界画定の時期である。第二段階は、19世紀半ばから1930年代の学術的な地図作製の発展期であり、主に帝立ロシア地理学協会がその業務を担った。第三段階は、1940年代から現在までである。「人

- 種地図」の科学的な完成度が求められている。レーメゾフの地図は、この第一段階の最初の地図として位置づけられている。前掲注(4)C. 66.
- (13) Постников А. В. Развитие картографии и вопросы использования старых карт. Москва. 1985. С. 127.
- (14) たとえば、アグネゼの地図(1525年)、1526年にモスクワに滞在したヘルベルシュタインの地図、1592年のジェンキンソンの地図などが挙げられる。前掲注(13)C. 131.
- (15) 前掲注(13)C. 132-133.
- (16) 前掲注(6)①94-97頁。
- (17) 「ゴドゥノフ図」のロシア語版の複写図は、『公務の地図帳』と『シベリア地図帳』に掲載されている。その他、「ゴドゥノフ図」が作製されてまもなくロシアへ来たスウェーデン人による複写図が3枚ある。前掲注(6)①98-107頁。
- (18) 地図帳に掲載された地図は、後世においてもシベリア各地の調査や探検に利用された。たとえばミッドドルフの1842~1845年のシベリア旅行ではレーメゾフの地図が十分に利用できることが述べられている。前掲注(9)③155-156頁。
- (19) 前掲注(12)参照。
- (20) 山根圭子「シベリアの都市建設——17世紀・18世紀はじめのトボリスク」(土肥恒之編『地域の比較社会史——ヨーロッパとロシア』日本エディターズスクール出版部、2007) 291-316頁。
- (21) その際、ゴドゥノフ図の作製にかかわったとするバグロフの説がある。Bagrow, L. "The first Russian maps of Siberia and their influence on the West-European cartography of N. E. Asia." *Imago Mundi* IX. 1952, p. 83.
- (22) 軍事勤務者(служилые люди)とは、ロシアがシベリアに送りこんだ軍事要員である。君主から俸給や褒賞を与えられ、軍事的な勤務を行う。当初はロシア本土から派遣されていた。次第に現地での永住化が見られるようになり、シベリアの移住者の主要な構成員となった。シベリアの軍事勤務者については、①Никитин, Н. И. Служилые люди в Западной Сибири X II века. Новосибирск, 1988. 日本語文献では②飯田ちひろ「16-17世紀のロシアのシベリア支配システム——軍事勤務者と国家——」『西洋史論叢』29, 2007, 13-28頁に詳しい。
- (23) 前掲注(9)①C. 29.
- (24) レーメゾフは、このような派遣業務や地図作製とは別に、線描画の芸術家としても才能を示していた。1694年には、イルティシ川にある礼拝堂のアイコンを描き、1696年には軍隊の旗のデザインを描いた記録がある。前掲注(9)①C. 36-37.
- (25) トボリスクの石造建築物指導者としてのレーメゾフについては、前掲注(20)参照。
- (26) この時作製されたとされるシベリア全体の図は、研究者が「エカテリーナ宮殿の地図」と呼ぶシベリア図である。この縮写版のシベリア図が『シベリア地図帳』の第21図であるとされる。前掲注(6)⑥206-209頁。
- (27) 『地勢図帳』(Хорографическая книга)の原本は、作製直後はトボリスクのレーメゾフ家に保管され、その後はヴォロンツォフ・ダシュコフ伯爵のコレクションのひとつであった。それから考古誌協会に移ったが、1914年の『アジア・ロシアアトラス』作製に際し、移民協会が地図の複製のために借りたまま、ロシア革命が起こってしまった。その後本屋の手に渡り、バグロフが1923年にモスクワの本屋から購入してドイツで受け取った。第二次世界大戦中には『地勢図帳』も含めたバグロフのコレクションはスウェーデンに保管されていた。戦後はハーバード大学に所蔵されることになった。掲載されている地図の大きさは、縦23cm×横17cmのものが多く、本の大きさは縦30cm×横19.5cmである。Revezov, S. U. *The atlas of Siberia by Semyon U. Remezov. Facsimile edition with an introduction by Leo Bagrow.* 1958, pp. 16-17.
- (28) 前掲注(27)参照。
- (29) 『シベリア地図帳』(Чертежная книга Сибири)の原本は、モスクワのロシア国立図書館のルミャンチェフ伯爵コレクションに所蔵されている。縦38.5cm×横53cm。この『シベリア地図帳』の原本が、トボリスクのレーメゾフからモスクワのシベリア庁に送付されたのは1701年である。その後しばらくはシベリア庁長官のヴィニウスのもとにあった。しかし、ヴィニウスが1703年に罷免されると、『シベリア地図帳』の行方もわからないままになった。前掲注(9)①C. 99. しかし、『シベリア地図帳』複製本と同時に出版されたテキストの巻頭論文によれば、ヴィニウスから何かしらのルートで歴史学者ミルレルの管轄下に渡り、その後エカチェリーナ2世のもとで、ミルレルを通してルミャンチェフ伯爵へと渡ったと推測されている。Молчаков, В. Ф. 'Чертежная книга Сибири С. У. Ремезов из коллекции графа Н. П. Румянцева'. (*Чертежная книга Сибири С. У. Ремезова исследования, перевод, комментарии, указатели* Т. II, 2003) С. 21-38.
- (30) *Чертежная книга Сибири, составленная тобольским сыном боярским Семеном Ремезовым в*

- 1701г. Издано Археографическою Комтссиею, СПб. 1882. これは前掲注(6)⑥⑦の論文において三上正利が分析史料として利用している。
- (31) *Чертежная книга Сибири С. У. Ремезова, Т. I-III*. ФГУП ПКО, Картография, Москва, 2003.
- (32) 『公務の地図帳』(Служебная чертежная книга)の原本は、1730年代にレーメゾフの息子の一人によって書き加えられた後、1764年まで所在不明であった。そして、1764年にエカチェリーナ2世の個人図書館において所蔵が確認されている。1775年以後は、エルミターージュ宮殿の外国図書館において、ロシア製手書き書籍として保存された。1852年にはヴィチコフ記念公共図書館の文書部所蔵に移動し、ソ連時代はレニングラードのサルトウイコフ・シチェドリシ記念公共図書館の文書部所蔵、現在はサンクトペテルブルクのロシア国立図書館の文書部所蔵となった。前掲注(9)①C. 109-110. 掲載されている地図の大きさは縦20cm×横31cm。本の大きさは縦38cm×横29cm。前掲注(9)①C. 100. 1730年から1764年の期間における『公務の地図帳』の所在については、アンドレーエフが以下のように推測している。1732年にトボリスクに流刑されたピョートル・フォードロヴィッチ・ミラヴィッチが、レーメゾフの年代記などのいくつかの史料をトボリスクで所有した。その後、歴史学者のミルレルに年代記が渡り、『公務の地図帳』は彼の所有のままだった。1764年に彼の甥であるワシリー・ヤコブレヴィッチ・ミラヴィッチが処罰された際に、彼の財産が処分された。その時に『公務の地図帳』も没収された後に皇帝のものとなり、エカチェリーナ2世の個人図書館に所蔵されたとしている。前掲注(1)③C. 146-147.
- (33) ①Семен Ремезов и сыновья. *Служебная чертежная книга*. Тобольск, 2006. ②Служебная чертежная книга, текст, коммунтарии. Тобольск, 2006.
- (34) 前掲注(6)①~⑦参照。
- (35) 前掲注(1)④参照。
- (36) 前掲注(1)③C. 116-131.
- (37) 前掲注(9)①C. 98-99.
- (38) 『シベリア地図帳』のすべての掲載図にロシア語表記だけでなく、朱書きのオランダ語表記が存在する。前掲注(31)参照。
- (39) 地図の内訳は、シベリア全図2枚、大ペルミ図1枚、ステップ地域図(カザフ・オルダの図)1枚、トボリスク都市図1枚、トボリスク地方図1枚、シベリア地域図17枚である。レーメゾフがシベリア庁で作製を命令されたのは24枚の地図であるが、完成した地図は23枚であった。欠けている24番目の地図は「クングール図」であると推測されている。前掲注(1)③C. 114-115.
- (40) 地図の内訳は、トボリスク周辺では、イルティシ川33枚、トボル川12枚、ミアス川4枚、イセチ川8枚、プシマ川9枚、トゥラ川8枚、タウダ川8枚などの河川流域を描いた大縮尺の測量図である。この地勢図の多くは、1684年以降のレーメゾフの派遣およびヤサク関連業務で収集した測量データが記載されていると考えられる。他のシベリアの河川としては、オビ川14枚、エニセイ川8枚、レナ川5枚、アムール川3枚の地図もある。これらの河川流域については、レーメゾフ自身のデータではなく他の地図からの写しであろう。前掲注(9)①C. 84-85.
- (41) 前掲注(9)①C. 108-109.
- (42) 前掲注(9)①C. 109.
- (43) 前掲注(33)②C. 24.
- (44) 『公務の地図帳』の目次に挙げられているものの掲載されていないいくつかの地図については、『シベリア地図帳』および『地勢図帳』に掲載されている地図もある。前掲注(33)①C. 102-103.
- (45) 前掲注(33)②C. 122.
- (46) 前掲注(33)②C. 92-93.
- (47) 前掲注(33)②C. 108.
- (48) カムチャツカ方面への探検として最も功績のあった人物として多くの文献に取り上げられている。前掲注(7)①112-114頁。
- (49) 筆者は前稿において、レーメゾフの『シベリア地図帳』掲載の「トボリスク地方の図」を用いて、ロシアのシベリア図と地域像の関係について論じた。山田志乃布「ロシア帝国とシベリア図——レーメゾフ作製の『シベリア地図帳』を事例として——」(藤井謙治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像——絵図・地図が語る世界——』, 京都大学学術出版会, 2007) 162-173頁。
- (50) 前掲注(33)②C. 111.
- (51) Boleslaw Szczesniak, "The seventeenth century maps of China: An inquiry into the compilations of European cartographers." *Imago Mundi* III, 1956. pp. 130-131.
- (52) 前掲注(8)95頁。
- (53) 前掲注(33)②C. 114.
- (54) グリデンベルクは、筆跡鑑定により、『公務の地図帳』の掲載図のなかで地図帳作製時点におけるレーメゾフによる地図は、6, 7, 11, 12, 13, 40, 41であると推定した。そしてその他の地図は、以前にレーメゾフが作製した地図や他の作者の地図をレーメゾフの息子達が複写・編集した地図であるとした。前掲注(9)①C. 106-107.

- (55) 17世紀のシベリアにおいて植民地が成立していく過程は以下のようなものであった。まずは占領したばかりの適当な場所に城塞(острог)が造られ、中央から地方長官や貴族、軍事勤務者が派遣された。また同時に教会も建設された。その後、占領地の開拓は、自発的にシベリアに移住してきた自由移住者によってなされ、彼らによって創設された中心集落を村(слобода)と呼んだ。さらにこの周辺に村(деревня)が発生して、中心集落を含む広い意味での村(これもслобода)が発展した。三上正利「17世紀西シベリアの植民と農耕地開拓」史淵91, 1963, 106頁。本稿では、слободаとдеревняの地図上での凡例をわかりやすくするために、前者を「自由村」、後者を「村」とした。
- (56) 前掲注(9)①C. 184-195.
(57) 前掲注(1)③C. 139-140.
(58) 前掲注(1)④C. 32-36.
(59) 前掲注(33)②C. 108.
- (60) シチェグロフ(吉村柳里訳)『シベリア年代史』原書房, 1975(復刻原本1943), 192頁, 199-202頁。
- (61) 前掲注(9)①C. 188-191.
(62) 前掲注(1)③C. 139.
(63) 前掲注(1)④C. 31-32.
(64) 前掲注(9)①C. 191-192.
(65) 前掲注(9)①C. 192-193.
(66) 前掲注(9)①C. 193-194.
(67) 前掲注(1)③C. 140. 前掲注(1)④C. 33.
(68) 前掲注(1)③C. 140. 前掲注(1)④C. 34-35.
(69) キベルソンは、レーメゾフの中国図の表現の方法の特色として、その国境地帯に明確に城壁を描くことに特徴があることを指摘しており、『地勢図帳』掲載の中国図にはそれがはっきりと見ることができる。前掲注(5)p. 187.
(70) 前掲注(7)①155頁。
(71) 前掲注(7)①154-172頁。

Analyzing Working Sketchbook by S. U. Remezov and the Image of Siberia

Shinobu Komeie

Abstract

Semyon Ul'yanovich Remezov (c.1642–after 1720) was a famous Russian cartographer. Remezov's maps are good examples of original national mappings in seventeenth-century and early eighteenth-century Russia. His works have been preserved in the form of three manuscript books of maps of Siberia. In the course of the following description these books are referred to by their original titles: (1) *Drawing Sketchbook of Siberia (Chertezhnaya Kniga Sibiri)*, (2) *Working Sketchbook (Sluzhebnyaya Kniga)*, and (3) *Chorographic Sketchbook (Khorograficheskaya Kniga)*. These three books consist of original maps and copies by Remezov and his sons. This paper examines the characteristics of the image of Siberia that emerges from these books in the political context of Russia's expansion to the east and south and its colonial control of Siberia.

In 1696, an order was issued by the Siberian court office in Moscow for the Siberian towns to produce maps of their respective region. The instructions directed that each map must contain all Russian villages and native settlements dependent on the district town and paying tribute to it, indicating the rivers on which they were situated, their names, and the distances from them to the town. The local governor entrusted this new task to Remezov in Tobol'sk, which was at that time an important Siberian administrative center. Remezov worked as an official surveyor and geographer in the districts surrounding Tobol'sk. He was not only a cartographer but also an official service man, and therefore, could directly copy many regional maps and information gathered in the Siberian court office in Moscow to compile *Drawing Sketchbook of Siberia* (1699–1701). His work thus reflected and represents the traditional image of Siberia in the context of Russian cartography before the Petrine reforms.

Working Sketchbook is Remezov's personal collection. After he finished *Drawing Sketchbook of Siberia*, Remezov and his sons collected various maps he had drawn himself or copied on his own initiative. These maps can be classified into eight groups. (1) Maps of Tobol'sk town and Tobol'sk districts. (2) Copies of regional maps in Siberia. (3) Four maps of Kamchatka. (4) Census maps in Tobol'sk and Tymen. (5) Maps by *Parfeniev*. (6) Maps by *Meina*. (7) Maps of all Siberia or a part of Siberia by other authors copied by Remezov. (8) Copies of maps of China published by European mapmakers.

The Kamchatka maps were made by Remezov with new information from Atlasov's expedition. Categories (4) and (5) represented the upper Tobol River region as a Russian land, in spite of the territories of native peoples that existed there. The image of Siberia represented by Remezov and his sons in *Working Sketchbook* expanded eastward and southward more than that of *Drawing Sketchbook* and *Chorographic sketchbook*.

Keywords: Russia, history of cartography, the image of Siberia, maps of Kamchatka, Tobol'sk, *Working Sketchbook* by Remezov